

---

**日々是平穩なり。**

いろは。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日々是平穩なり。

### 【Nコード】

N2141Z

### 【作者名】

いろは。

### 【あらすじ】

シカマルと、暗号解読班の少女のほのぼの話。

出会いとか。

## 木の葉暗号部

此处では日々、名前の通り暗号を解読に挑む者が集まり、頭を抱えている。

この部の中では若手の少女、如月いろはは、集団から少し離れたところで様子をみていた。

ガチャッ

↓

「あたッ」

突然扉が開いた。

勢い良く開いたもので咄嗟に反応出来ず扉に頭をぶつけた。

「あ、悪い・・・大丈夫か？」

黒髪を一つで束ねた青年、少年の間くらいの人が入ってきたようで、扉をぶつけてしまった事を謝った。

「大丈夫です・・・」

本当は、結構痛い。

「何でこんな所で突っ立ってるんだ？暗号解読班の奴だよな？」

「・・・・・・・・腹、痛いんです」

朝喰った物が駄目だったか・・・・・・・・って朝飯喰ってないな。

「・・・・・・・・医務室行け・・・・・・・・」

いろはの頭をポンつと触って溜息混じりにそう言った。

これが、出会いだったりする。

クク・・・照れてんのか？

「どうして、此処へいらしゃったのですか？・・・あ、もしかしてあの暗号の持ち主さんで・・・」

「ああ、察しが良いな。俺は奈良シカマルだ」

「如月いろはです」

何か、此処だけ雰囲気が違う・・・？否、気のせいだろ・・・多分。

奈良シカマル・・・先輩。

何処かで聞いたことがある……。

ふと目に入ったのは、顔を真っ赤にしておどおどしているぐるぐるめがねのシホ先輩。

あー……シホ先輩の言ってた人だ。

あら、先輩の動きが……

「うわぁあッ!?!」

……前から辞書並みに分厚い本が飛んで……きた。

ガコッ

「い、いろは!?!」

痛い、おでこが。

「……」

いろははそっぽを向き、額を押さえた。

「やっぱり痛いだろ・・・額、見せてみる」

痛すぎてこの手を放すのはちょっと苦しい、でも奈良先輩が見せてみると言うので見せるしか無い。

奈良先輩の方へ身体を向けると、前髪を上げられた。

見られるの、恥ずかしい・・・

「擦り傷出来てるし、赤いな・・・」

「……………っ／／／」

いろはは袖を伸ばし両手で顔を隠した。

「クク……照れてんのか？」

「て、照れてないです……」

奈良先輩は、笑っていた。

暗号解説、笑顔が好き。

「おし、これでOKだ」

奈良先輩が、私のおでこに絆創膏を貼ってくれた。

「ありがとうございます」

絆創膏を貼った所がくすぐったくて、

ちょっと、嬉しかったりする。

少し照れていると、暗号部の人が奈良先輩の方へ歩いていった。

「スイマセン、奈良さん。この暗号さっぱり解んなくて・・・俺達には無理ッス・・・」

ご丁寧に暗号文を頭を下げ返している。

「そっか・・・」

奈良先輩が少し落ち込んでいる様子も見えて、胸辺りが痛くなった。

暗号文がチラッと見えたが、文字が模様のようにびっしり詰まっ  
ていて、さらに紙が古く、文字があせたり滲んだりして読み辛い。

「いろはは、読めるか？」

突然話を振られた……。

「ん……ちょっと、解いてみます……」

取り敢えず、部屋では無理なので暗号文を持って森の中へ走った。

あの術、疲れるんだよな……。

でも奈良先輩が私に少しでも期待してくれるんだから、やろう。

……ってか久しぶりに使うから、忘れてないよね……？

森の中を少し入った所で、立ち止まった。

後ろからは奈良先輩が着いていている。

よし、やる。

クナイを取り出し、地面に陣をかく。

半径50センチ程の陣。

そこに一定間隔で印を入れていく。

そして暗号文を地面に置き、腰のポーチから巻物を取り出す。

紐を解き、巻物を手から離れた。

すると、巻物は重力に逆らい、宙に浮いた。

少し長い印を結ぶ。

「物読心の術」

術名を述べるのを合図に、巻物の文字が青白く光りだした。

そして文字が不規則に暗号文の方へ移動していく。

「すげエ……」

シカマルはその能力に感動していた。

レベルの高い術。印の長さで分かる。

如月いろはの親は、父が如月ヨウ、母が日高レンカ。

如月一族の血継限界は、風を操る。

日高一族の得意技は、幻術。

その2つの一族の血を引き継ぐいろはは、幻術を利用し暗号を解読する。

光が淡くなっていく。

完全に光が無くなったと同時に巻物がパタリと落ちた。

いろはは地面に置いてある暗号文を拾い、読む。

「おし、成功……多分ですけど、どうぞ」

シカマルは受け取り、いろはと同じように暗号文を読み上げた。

「現代文にわざわざ変換してあのか……すげえないろはッ」

奈良先輩ははにかむように笑った。

こんなに褒められたの、初めて。

今日は何かと嬉しくなる。

「そ．．．そんなにすごくないです．．．．．」

袖を伸ばして口許を隠した。

「クク．．．また照れてンな．．．」

ぐりぐり頭を撫でられた。

また顔の筋肉が緩んだのが、自分でも分かった。

本当は奈良先輩の笑顔を見た時、ドキツとした

眩暈と暖かい背中。

「寒いなあ……此処」

森の中に十分な光が届かず、気温が下がっている。

奈良先輩はポケットに手を突っ込んで、首を竦めた。

「さっさと出るか……風邪ひいちまうぜ」

奈良先輩が歩き出したので、急いで着いて行こうとした時、眩暈がしてしゃがみこんだ。

「いろは！大丈夫か！？」

奈良先輩が駆け寄ってきた。

目、閉じてるのにぐるぐる廻る感覚がして変な気分になる……

「いろは、立てるか？」

取り敢えず立って見たが、またフラついて奈良先輩に支えてもらっ

た。

「さっきの術の反動か・・・？少し揺れるけど、我慢してくれよ」

「・・・あ、」

奈良先輩が、器用に私を背負った。

あったかい・・・。

てか、絶対重いのに・・・。

眠い・・・

この時間が、いつまでも続けば良いなと思ったりした。

書き込み中・・・

あつたかい・・・

ふかふかする・・・

「ん・・・」

目が覚めたら、夕方。

空が茜色に染まってる。

え、てか此処何処。

知らない所で軽く焦った。

不法侵入して爆睡したとか嫌なんだけど。

どっから私はベッドの上にいる。

すごいシンプルな部屋だな……

そう思って辺りを見まわしたら、中忍ベストがハンガーに掛けてあった。

……奈良先輩の部屋、とか。

え、すごい良い匂いするよこのベスト。

……先輩の、匂い……

顔が紅くなったのが自分でも分かった。

本がある……、あと、将棋も。

将棋好きなのかな……てか好きそうな顔してるよね、囲碁とか。

私は囲碁しか出来ないけど。

ガチャッ

突然ドアが開き、ビクッと反応してしまった。

入ってきたのは、予想通り奈良先輩。

ベストを着ていないので、細身の体がよく分かる。

「おお、悪い。脅かしちゃったな。なんか喰うか？昼飯喰ってないだろうし」

「え、否いいです……」

ぐ……

絶妙なタイミングで腹が鳴りやがった。

恥かし……

「へっ、腹の虫が鳴いてんぞ？」

「ベッドのスプリング音ですよ」

「いいぞ、隠さなくても」

「……………」

口が強いのはきつと歳の差であり、私がMな訳じゃ無い……………多分。

否、逆を考えれば奈良先輩がDSなんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2141z/>

---

日々是平穏なり。

2011年12月11日14時53分発行